
ふたりだけの卒業式

忍者ムラサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりだけの卒業式

【Nコード】

N8525Z

【作者名】

忍者ムラサキ

【あらすじ】

「バクマン。」の二次創作。福田真太のコンビニバイト時代。夢小説。自ブログとpixivに掲載済。

「なっ、なんで。なんでこんなに部屋がキレイなの」

家に来たユミちゃんが驚いてた。

「なんでって、掃除したからだよ。あたしだって掃除くらいするんだから」

「そうかな。しないと思ってたけどな。あ、なくしてたボタン出てきたりしたんだ」

ユミちゃんがテーブルの上にある小さな透明なボタンを見て言った。

「それ触らないでね。大事な人のだから」

「彼氏の」

「違うけど、大事な人のだから」

「ふうん」

片付けられない女とはあたしのことだ。人間、掃除なんかしなくても生きてける。坂口安吾だって床が見えない部屋にしながら、立派に小説を書いたじゃないか。部屋のキレイ汚いは人間の価値とは無関係だ。

だからウチは散らかってる。掃除をしようと思ったら、まず掃除機に積もったホコリを取らないといけない。ゴミの日に起きられなくて出せなかったゴミ袋もたくさんある。流しには洗ってない食器の山。

自炊するには洗い物をしないといけないけど、めんどうだからコンビニのお弁当で済ませることにした。

利用してるコンビニは最低だ。コンビニ全体としてはいいんだけど、この、早朝の時間帯のバイトの子が最低だ。あいつ、よくお弁当に箸付け忘れるんだよ。1回家に帰って気付いたら、その度にコンビニまで箸を取りに戻らなくちゃいけない。買ったお弁当とレシ

ートを持つて。その間に温めたお弁当は冷める。でも箸を洗うなんてしたくない。

今日も例のごとく福田くんだった。福田くんってのは最低のバイトの子の名前だ。もう名前も覚えた。

箸の件さえなければ、福田くんは実はとってもいい。白に近い銀髪で、スリムで、人を射抜くような三白眼をしてる。ミュージシャンみたいでかつこいい。たぶんバンドか何かやってるんだと思う。

でもあたしのいちばん好きなのは、福田くんの指だ。お釣りをもらうときに気付いた。細くて、長くて、それでいて関節がしつかり出てて、男の人の指って感じがした。そのくせ、指使いがしなやかだ。アーモンドみたいな爪の形もキレイだと思う。長丸くて、付け根より先端が細い形。まあアーモンドほど先は尖ってないけど。

まあ、正直に言くと、好きだ。箸を付け忘れるのをわかってながら、いつもこの時間帯に利用してるのはそのせいだ。だって会いたいんだもの。

そして、福田くんは今日もやってくれた。家に帰って袋を開けたら、箸が入ってなかった。あたしはコンビニに戻った。

「いつも、すみません」

福田くんは箸を袋に入れながらそう言った。いつも、って言った。そんなことを言われるのは初めてだった。毎回ただすみませんって謝るだけだったから。

「いつもしてるって気付いてたんですか。覚えてたんですか。それなのになんでお弁当には箸って忘れるんですか」

気付いたらあたしはけっこうキツイ感じで返してた。

「すみません」

「いいです。ちょっとあたしの言い方キツかったです。こちらこそすみません。お弁当には箸、それ覚えてくれたらいいです。また、来ます」

「今度。今度は忘れません。もう忘れません。もし忘れたら俺は家まで届けます」

「ほんとうですね。約束ですよ。忘れたらほんとうに届けさせますから」

まさかその言葉がほんとうになるなんて思ってたなかった。

それからしばらくはちゃんと箸が入ってたんだけど、ある日福田くんはついにやらかした。

「箸、入ってなかったんですけど」

約束してたから、あたしはコンビニに電話した。電話番号はレシートに書いてあった。出たのは福田くんだった。

「前に家に届けてくれるって言ってましたよね。待ってます。届けてください」

「すみません。でも家がわかりません。やっぱり取りに来てください」

「ダメです。約束したんです。来てください。住所言います」

こんなこと言うなんてクレーマーみたいだなんて思った。でも約束だ。それにもうコンビニまで戻るのもめんどうだ。あと、正直に言う。会いたい。コンビニじゃないところで会いたい。

「わかりました。その住所で間違いないんですね。すぐ、届けます。待っててください」

少ししたら、ほんとうに福田くんが来た。コンビニの制服に、ジーンズ姿で、ブーツをはいていた。福田くんの靴は初めて見た。

いいのか、って思った。いくら見た目がかっこいいと言っても、好きだか思ってたても、それ以外なんにも知らない男の人に住所おしえて、ひとり暮らしの家まで来てもらうって、それほんとうにいんだろうか。でももうしてしまったことだ。何かあってもあきらめるしかない。いい。好きだしいい。

「すみませんでした」

「いいです。あたしこそ、ムリ言いました。忙しいのにすみませんでした。箸、ください」

「あ」

一瞬の間の後、あたしも福田くんも気付いた。福田くんは手にも持ってなかった。

「箸、持ってくるの忘れました」

その言葉と共にあたしは切れた。

「この、クソ店員、何してんだ、何しに来た、いつもいつも箸付け忘れやがって、あげくの果てには持ってくるのも忘れたとか、ありえねーだろこの能ナシ」

「は。お前何クソ店員とか言ってたんだこのバカ。箸ぐれー家にあんだろーが。そんなことでいちいち家に呼びやがってふざけんなこのクソ女」

福田くんも切れた。こいつ客商売のクセしてなんつー態度を取るんだ。信じられない。

「箸はあるよ」

「じゃーそれ使えはいーじゃねーか」

「あるけど洗ってない」

「洗え」

「洗うのめんどくさい」

「っ、たく、じゃー俺が洗ってやるよ、それでいーだろーが」

あたしの返事も聞かず、福田くんはブーツを脱いだ。そして流しの前に立った。

「ここだな。この汚ねー食器の山ん中にあるんだな。どーなってんだこの洗い物の山は。お前最悪だぞ」

「あるよ。どこかにあるよ。箸を見つけて洗って。それ終わったらそこにあるヤツ全部洗って」

「は。なんで俺がそんなことしねーとなんねーんだ。俺は家政婦じゃねーんだぞ」

「箸忘れたお詫びに全部洗って。そうしないと本部に連絡する。この店舗の福田って店員が最悪ですクビにしてくださいって言う」

「信じらんねーこと考えんなお前は。いー。わかった。全部洗う。本部にチクんのはやめろ。クビにはなりたくねー」

箸だけ先に洗ってもらって、あたしはそれでお弁当を食べた。食べてる間、洗い物をしてる福田くんを見てた。

「最悪だ、なんだこのぬるつきは。ギヤー、カビ。今度はコゲ。取れるかこんなモン、タワシどこだ、あーあった。クソ。信じらんねー。なんなんだ、なんでこんなことになってんだ俺は」

なんかブツブツブツブツ言ってる。

お弁当を少し食べた時点であたしは反省してた。ないな、って思った。知らない男の人に洗い物させるって、あたしはどれだけ失礼なことをしてるんだ。さっきはお腹が空いてたんだ。だからちよつとイライラしてたんだ。

「オラ、終わったぞ。どーだ、キレーになっただろーが」

「はい。ありがとうございます」

「もーちよつとキレーにしとけ」

「はい。すみませんでした」

「なんだ、どーした、さっきの威勢はどこ行っただ」

「すみません、でした。イライラしました」

ひたすら謝るしかなかった。それでも許してくれるかどうかかわからなかった。何かお詫びをしないとイケない。

「こつち。流しじゃなくて、部屋の方来ませんか。お茶、飲んでってくださいませんか」

「お茶飲んだらまた洗い物が出んだろーが」

「冷蔵庫にペットボトルのがあります。それ、飲んでください。もしたら洗い物出ませんから」

「そーか。そーだな。俺も疲れた。お茶をもらっ」

福田くんは冷蔵庫を開け、お茶を取り出し、床にあるものを踏まないよう気を付けながらあたしの傍まで来て、向かいに座った。

「流しも汚ねーけど、床もそーとーだな。何がどーなってここまでなったんだ。失恋か。失恋でもしたのか」

「そんなものしてないです。あたしはただ掃除がキライなだけです」
「いやいやいや、待て、キライも何も程度っつーモンがあんだろー」

が。こんなモン人の狂気だ。お前は異常者だぞ」

「だいじょうぶです。あたしは正常です。掃除なんかしなくても死にません」

あたしはお弁当を食べてる。福田くんはその向かいに座ってお茶を飲んで。あれ、って思った。好きな人と部屋でふたりきりで、お弁当を食べながら、相手はお茶を飲んで、お話してる。これは何。この嬉しい展開は何。

「福田くんはバンドをやってるんですか」

この際だからいろいろ聞いてみることにした。

「やってねーな」

「じゃあひとりで音楽作ってるんですね」

「作ってねーな」

「じゃあその髪型はなんなんですか。何してるんですか」

「自由業だ。兼フリーターだ」

「音楽以外思い付かないんですけど。なんですか」

「それは言えねーな」

「じゃあ本部に連絡」

「待て、それはやめるバカ。わかった言う。言うから本部はやめる。マンガだ。マンガを描いている」

「うそだ。そんな格好のマンガ家いるわけじゃないじゃないですか。ベレー帽かぶってないじゃないですか」

「お前のマンガ家のファッションは何時代で止まってんだよ。描いてるモンは描いてんだ」

「証拠は」

「は。証拠なんてねーよ。この状況で何をどーやって証明しろっつーんだ。俺の家ならまだしも」

福田くんは考え込んでた。

そして、ペットボトルを床に置き、あたしに手を見せた。

「指。右手の中指の爪の横。ホラ、ここな、ポコッて出てんだろ。」

これペンダコッて言うんだ。いっつもペン持ってるからな、こーな

る」

「そんなのあたしにもありますけど。勉強したら自然にそうなりますけど」

あたしも福田くんに手を見せた。でも、比べてわかった。

「大きさ、違いますね。福田くんのほうが大きいですね」

「だろ。信じる。俺はマンガ家だ。そんなに描いてねーけど。だからコンビニでバイトしてる。ちゃんと描けるよーになるまでこの生活続けるつもりだ」

「はい。信じます」

信じるけど、なんでマンガ家なのにこんな格好なんだろう。おかしくないか。マンガ家なのにかっこよすぎないか。

「福田くん指がキレイですよ。あたし見る度そう思っていました。爪の形がアーモンドみたいって」

「そーか、そーなのか」

「うん。繊細な感じがします。きっと描いてるマンガも、人の心を細かく切なく美しく描写する恋愛の話だったりしませんか」

「は。んなモン描くわけねーだろうが。今描いてんのはヤンキーのバトルマンガだな」

「え」

なんだ。なんでこの格好でそんなものを描いてるんだ。おかしくないか。

いやでもさっきの切れ方じゃ、ヤンキーのバトルマンガもありだな。そうだ、それだ、ヤツはこっちだ。

それから福田くんが帰るまで、あたしたちはいろんな話をした。

福田くんの名前は真太っていうこと、今は新妻エイジって人のアシスタントをしてること、ジャンプで連載するのを目指してること、担当が雄二郎っていうアフロの人なこと、好きなマンガは『とらぶる』ってこと、好きな食べ物がとんこつラーメンだってこと、バイクが好きだってこと、広島出身だってこと、誕生日が1990年7月27日だってこと、血液型はB型だってこと、身長が179センチ

チだつてこと、体重は66キロだつてこと、ジーンズのサイズは27インチだつてこと、普段は白いニット帽をかぶってるってこと、ヘブンアンダーグラウンドの財布を使ってるってこと、チエーンは短いから長いドクロのに付け替えたこと、シャンプーはダヴだつてこと、ボケノートやってるってこと、好きな音階はファで、好きなひらがなはぬで、好きなカタカナはヲで、好きなアルファベットはQで、好きなじゃんけんの手はチョキだつてこと。

それから、今、彼女はいないってこと。
完全に、好きに、なつてた。

福田くんは何度も何度も箸を入れ忘れた。その度にあたしの家に来た。家に来て、お茶を飲んで、お話して、帰った。もう洗い物はしなかった。

最初に家に来たときに、何かあつてもあきらめるしかないなんて思つたけど、なんにもなかった。バイトが終わってから家に押し掛けてくるとか、キスされるとか、やられるとか、そういうのはなんにもなかった。悲しいことになかった。

ある日また福田くんが来た。

「箸、持ってきた」

「うん」

そして、部屋には上がらず、玄関でこう言った。

「今日で最後だな、この家来んのも。俺、今日でバイト終わりなんだ。連載決まったから、バイト辞めることにした」

突然の言葉に、足元からガラガラと崩れ落ちてくような気がした。
「辞め、なくても、いい、んじゃないの」

あたしの言葉は途切れて、上手に伝えることができなくなつてた。
「ムリだ。1週間で19ページ描くんだぞ。時間足りねーんだ。アシスタントも呼ばねーと原稿仕上げらんねーんだ。バイトなんかしてるヒマはねー」

「あたしの、箸は、どう、するの」

我ながらわけのわからないことを言ってると思った。同時に、福田くとあたしのつながりはそれだけだったってわかった。

「箸は他のバイトが持ってきてくれんだろ。いや、そもそもそれはねー。ちゃんと付けてくれるはずだ。俺よりやれてるよ、みんな、たぶん」

「連載は、いつ、終わるの。バイト、再開、する日は、いつ」

「お前何言ってるんだ。終わる日なんて来ねーよ。もうバイトもしねーよ。ゼッター終わらせねー。長く、長く、ずっと長く続く。俺はそーしてーって思ってる。だからそーなる。そーなるよーがんばるんだよ」

強い言葉だった。言葉だけじゃなく、目の中にも必ずそうしてみせるっていう気持ちが宿ってた。

福田くんはあたしをおいてどこかへ行ってしまう。マンガ家っていうあたしとなんのつながりもない世界へ行ってしまう。あたしはひとりここに取り残されて、追うこともできず、福田くんへの気持ちを抱えながら毎日毎日生活を続けるだけだ。変わってくのは、やりたいことを実現させた福田くんと、何も変わらないあたしの距離がどんどんどんどん離れてくってことだけだ。

家なんてわからない。電話番号も知らない。メールアドレスも知らない。いろんなことを聞いた。でもそういうプライベートな時間へつながらる情報をあたしは聞き出せなかった。

何も言うことができず、あたしはただ首を横に振った。

「わかれ」

福田くんは切なげに目を細めて、強い口調でそう言って、唇を噛んだ。

「わかるよな。俺がやりたかったことはコンビニの店員じゃねーって。マンガ、連載してーって。人気作家になりてーって、そー言っただよな俺。そーいうこと全部お前に話したよな。全部、わかってくれてると思ってた」

「それは、聞い、た。そう、なったら、いい、って思ってた。ただ、

会えなくなる、つてのは、考えて、なかった。そう、なりたく、ない」

「そーだな。俺もここ来たとき楽しかったな。そーいうのなくなると思うと、ちょっと、さみしーよな」

言って福田くんはあたしに背を向けた。

「さよなら」

なんにもなかった。キスされるとか、やられるとか、そういうのはなんにもなかった。あたしと福田くんの間にはなんにもなかった。行っちゃ、やだ」

背を向けた福田くんに、あたしはしがみついていた。折れそうなほど細い腰に手を回し、大きくて堅い背中にも顔を押し付けた。肩甲骨があたしの顔に当たって痛かった。でも、その痛みすら、あたしにとつては大切なもので、手放したくない大切なもので、福田くんがあたしに与えてくれた大切なもので、だからもう一度チカラを込めて抱いた。

「少し、話を、聞いて」

「うん」

考えた。考えた。考えた。こういう気持ちをどう伝えていいのか考えた。でもどう考えてもたったひとつの言葉しか出てこなかった。だからそのまま伝えることにした。それしかなかった。

「好き」

「うん」

福田くんはただそう返事をした。背中を抱いてるあたしには、福田くんの顔は見えなかった。

「福田くんは、あたしのこと、どう、思う」

「そーいう風には考えてなかった」

「そっか」

「でも、キライではないな。ただ、考えてなかったただけだ。悪かった」

その言葉があたしと福田くんの間に壁を作った。でも、そのまま

でいるのはもうイヤだった。乗り越えなければならぬ。

「お別れに、キス、して、ほしい」

「できない」

「1回でいい、それだけで、いい」

「できない」

「理由は、どうして。前に彼女はいないって言った。なんで、なんでダメなの」

「理由は、ない。俺にはできない。ただそれだけだ。もし、そーいう男が好きなら、お前はそれを好きになれ。俺のことはキライになつていーから」

ハッキリ拒絶されてわかった。福田くんはそういう人じゃないって。好きでもない女の子にキスするような人じゃないって。だからもうこれ以上言えないって。言ったら福田くんの心を壊す。そしてキライになんかなれないこともわかった。もうキスなんてどうでもよかった。福田くんの気持ちを大切にしたかった。そして、あたしの気持ちも。

このままどうすればいいのかわからなかった。何か、何かしなければいけない。そうしなければ終わってしまう。

「じゃっ、じゃあ、その制服の、第2ボタンをちょうだい」

「は」

福田くんも驚いてたけど、あたし自身もそうだった。何わけのわからないことを言ってるんだって思った。

「それはあれだろ、学生服の場合じゃねーのか。なんだそれ。コンビニの制服でそれはねーだろ」

「いい、もう、それでいい、なんでもいい、とにかくあればいい。

ああ、でも店長さんとかに怒られるかな、ボタンどこやった、弁償しろって」

「いや、それはねーけど、たぶんねーけど、いーのかそんなモンで、やっぱりお前は異常者じゃねーのか」

「だからあたしは正常だってば」

あたしは福田くんの腰に回した手を離した。

そうして部屋に行き、床の物をひっくり返ししながらハサミを探した。それは意外とすぐに出てきた。

玄関に戻って、福田くんにハサミを手渡す。

「福田くんが切って」

「うん」

やりにくそうにしてたけど、3回動かしてなんとか切れた。あんまり切れるハサミじゃなかったのかもしれない。

「ホラ」

ボタンが福田くんの手から、あたしの手のひらの上に渡った。ついでにハサミも返ってきた。

「なんだこれ。何してんだ俺は」

「卒業式みたいだね」

「ねーよ。そんな卒業式どこにあんだよ。この格好で行ったら家帰されるわ」

「コンビニの店員の卒業式ってことでいいんじゃないの」

「んなモンねーよ。じゃーお前もなんかしろ。あれだ。部屋を片付ける。片付けられない女の卒業式をしろ。それで対等だ」

「別に競ってたことはなかったけど」

「いーからやれ。これで部屋が片付かなかったら俺とお前のバトルはお前の負けだ」

「いや、だから、別に競ってたことはなかったけど」

さすがヤンキーのバトルマンガを描く人だ。何この発想。基本勝ち負けだよ。

「わかった。掃除する」

「そーだ、そのとーりにしろ。あとな、あれだ、こーやって付き合ってもねー男を部屋に入れるな。まー、お前は俺のことが好きだったつーから、それはアリにしとく。でも他の男は入れるな。何するかわかんねーヤツもいるから。それは約束しろ」

「うん。わかった。約束する」

「じゃあ、これで。元気でいろよ」

「福田くんもマンガががんばってね」

「ジャンプ、チェックしとけ。福田真太でそのまま載るから」

「わかった」

「じゃーな」

「さよなら」

福田くんは静かにドアを閉めて出てった。

さようなら。元気でね。マンガががんばってね。人気作家になってね。あたしのことは忘れないでね。あたしも忘れないからそうしてね。部屋は片付けます。付き合ってもない男を部屋に入れません。ジャンプをチェックします。

もし今度会えたら、キレイになった部屋を見せられるといいな。付き合ってもない男を部屋に入れないっていう約束だから、そのときは彼氏になって部屋に来てね。もう散らかさない。いつ福田くんが来てもいいようにしとく。

あたしは手のひらの小さな透明なボタンを見つめながらそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8525z/>

ふたりだけの卒業式

2011年12月26日22時56分発行